

草の芽句会だより

NO,107
29,7,6

城濠の涼しき風の生れをり

貞子

万緑の老若男女ウオーキング

雀来てブランコ揺れぬ梅雨ぐもり

純子

梅雨明けを待たるる朝の城下かな

夕焼けの色に染まりし植田かな

禮子

天主閣みどりの上にそゝりたつ

合歓の花咲き継ぐ濠に影映し

剋子

子雀の枝に群れをる合歓の花

老人の地に描き教う木蔭かな

範子

玄関に風知草揺る美しき

野良猫の横切って行く小暑かな

文子

合歓の花眠たくなりし城の午後

真昼間のひまわりの花咲き競ふ

節子

にぎやかに夏燕来ぬ土間を掃く

戦死せし父の好みし茄子そうめん

貞

夏草のきれいに刈られ遍路徑

梅雨明けの近づく気配昨日今日

芳子

帰省の知らせ孫より届く夕べかな

出席者 森 馬場 川原 小山
投句者 大黒 吉崎 氏家 真鍋 小林



梅雨の晴れ間とあつて城山は結構な人出。うるし林ではくちなしが風に流れて匂っている。「合歓はまだ咲いているかなあ」心配したけれど、それでも終わりの花が薄紅色に残っていた。人の目に気付かれず静かに咲く合歓の花に心を寄せるようになったのは歳のせい？、茄子そうめんの句で思い出したことがある、昔、姑が作ってくれたのだが子供達が見向きもせず、申し訳なくて私だけが無理をして食べたことがあった。俳句には時折り忘れられない思い出が従ってくる。今日のお昼は、冷たい茄子そうめんを作ってみよう。